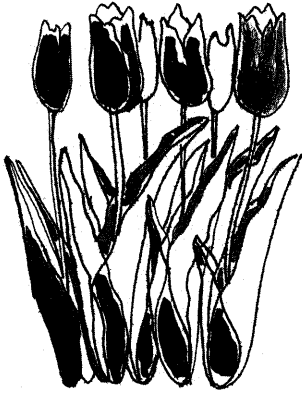


新入学児と学校



濱口 紀恵

小学校入学の前に、ランドセルを買ってもらったときの喜びと誇りを、大人になっても記憶している方は案外に多いのではないかと思います。毎年四月に入ると、日本中の六歳になった子どもたちが、数日後にせまった入学式を楽しみに、ランドセルを意味もなく背負ってみたり、開け閉めしたりしていることでしょう。

と、こんな光景をつい空想してしまうのも、新一年担任と決まった教師も、桜の花の咲きほころぶにつれて、新入学児同様の落ちつかない気分になっていくものだからでしょう。

新入学児を迎えるための準備のあれこれも、入学式の式次第も、毎年ほぼ同じ、年一回の恒例の行事な訳ですが、まだ見ぬ同士が、一年間いっしょに暮らすという約束のもとに出会う期待と緊張はやはり失われるものではありません。

新一年担任となりますと、春休み中のひとけのない校舎にあつまって、まず百数十名の児童のクラスわけからはじまって、机やロッカーやくつ箱などに名札をはって

まわったり、教室を飾りつけたり、何度となく児童名をよみあげ書き記すそのたびごとに、この子はどんな子だろうかと、繰り返し繰り返し思いながら入学式を迎えるのです。自分がかつて教えた児童の妹や弟が入学してくるとなると、ことさらに可愛く思えて、その児童を担任することになっている同僚に、「どうか宜しく。」と、まるで親類の子どものことでもあるかのようにあいさつしあったりしています。

まだ産まれる前の子どもの顔かたちやら性格を空想せずにはいられない母親のような思いで、春休みをすごしますので、いよいよ入学式の日、体育館にそろった子どもたちの前に、担任として立った時には、「これが私のクラスか」と、やっと出会えたという思いになります。

さあ、明日から、この子どもたちは、母親が直接には助力できない「学校生活」を、担任を頼りとして「暮らしていく」のです。

子どもらは、「勉強をしている自分」を漠然と想像

し、むずかしい字をスラスラと読んだり書いたりしているイメージに、「もう赤ちゃんじゃないことの確実な証拠」を得た思いで意気揚々と入学してきます。

学校が勉強する場所であるという認識は、全くその通りなのですが、勉強するということの現実には、夢に描いていたような「知識の獲得と、その結果として得る輝かしい賞賛」ではなく、子どもらの想像を超えて多岐にわたる生活全般のいちいちを「自分でやりとげる」しんどさの繰り返しです。

このギャップに、はじめの一週間で、さっそく子どもらは気づき、失望し、混乱します。「先生はちっとも勉強を教えてくれない。」と感じて失望するのであり、良い子になってみせるぞと決意しているものの、どういふ子が良い子なのか、自分にはわかっていないのだと気がつきはじめるから混乱を生じるのです。

次に記したのが、入学後一週間の、子どもらの学校生活のあらましです。

第一日目（入学式）

○自分の席を覚える。

○名前を呼ばれたら、大きな声で返事をする。

第二日目

○よい返事の仕方。

○話のきき方。（最後まで黙ってきく。意見、質問がある時には、手をあげて、順番に話をする。）

○ランドセルのロッカーへのしまい方。

○起立、着席の仕方。

第三日目

○話のきき方。

○学習用具のしまい場所としまい方。

○トイレの使い方。

第四日目

○話のきき方。

○自己紹介。

○チャイムの合図について。（始業、終業、5分休み、始業……）

○整列の仕方。

第五日目

○話のきき方。

○整列の仕方。

○校内めぐり。

○教科書の扱い方。

第六日目

○話のきき方。

○鉛筆の持ち方。

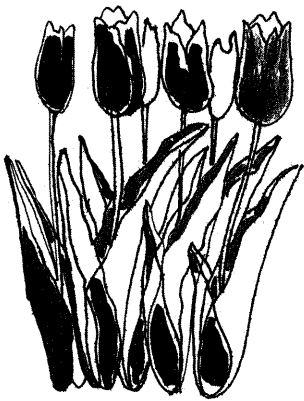
○自分の名前を書く練習。

○好きな絵を描く。

一年生がまず学ばなくてはならないことは、「話を最後まできく。」「順番に話す。」「チャイムの合図に従って自律的に生活する。」ことです。これらのことは、幼い子どもたち、それも、「先生にほめてもらいたい」という野心でいっぱいの子どもたちにとっては、とてもむずかしいことです。「よい子になってみせるぞ。」という決

意にもかかわらず、あるいは決意ゆえに、例えば、ひらがなの書き順を説明している但任にむかって、いきなり、「ぼくね、かけ算知ってるよ。本当だよ。あのね、にいちが2でしょ……。」とやらかして叱られるといった失敗を繰り返すなかで、「ぼくの先生」は「みんなの先生」なのであり、「ぼくの学校」が「みんなの学校」でもある以上、みんなでもおりあって暮していくためには、ルールが必要なのだということを理解していくのです。

小学校は、単に子どもに知識を与える場ではなく、社会性を伸ばすための場所です。知的な面での発達のみを考えれば、能力差のいちじるしい三十人から四十人の子どもをひとまとめにして勉強させることは、何とも非効率的なことです。「覚えさせる」という点においては、家庭教師や小人数制の塾の方が、はるかにすぐれた効果をあげているのではないのでしょうか。公立小学校が、他の教育産業と全く違うところは、子どもが生きている現



実の生活全体を扱っているということ——子どもらが、他の人間との関係の中で暮らしている、その暮らしを円滑に、自律的に、行うにはどうしたら良いかを学ぶ場であるということにあります。

一クラスの中には、必ず「気に入らない奴」の一人や二人はいるでしょう。その時に好きにはなれないまでも、何とか折りあって暮らしていく方法を考え出さない限り、毎日お互いに不快な思いを繰り返してしまいきます。また、自分はどう理解できた、先に進みたい……と思っている時にも、「待つ」「教える側にまわる」ということが出来なくては、生活が成りたちませんし、逆に、学習が理解できない時に「自分から尋ねる」ことが出来なくては暮らしていけないのが、学校です。

子どもらは、「先生に勉強を教えてください」つもりで

入学してきますが、一年間を過ごす間に、「先生がいなくとも、子ども同士協力しあって勉強する」ことを学ぶのです。

四月、五月の頃、子どもらは、自分が次に何をすべきであるかを判断するのは、大人である教師の役目であると思ひこんでいます。言われたこと以外はしなくともよいと呑気にかまえている、三十数名の子ども一人一人に、次々と指示を出すために、担任は一日中走りまわり、声をからしてすごしています。授業中よりもむしろ、それ以外のこと、給食の仕度や片付け、子ども同士のケンカの仲裁などといったことに労力をとられてクタクタになっているものです。終業のチャイムがなるたびに、「先生、トイレにいつてきていい?」「先生、水のん

でくる」「先生、本よんでもいい」と、細々としたこと
のいちいちに判断を求める子どもらに取りまかれ、何で
こんなことまでいちいち答えなくてはならないのだろう
か、幼稚園で集団生活を経験してきたことはいったい何
の役に立っているのだろうかと思わされる程、幼い子ど
もたちです。

子どもらが、教室のそうじをしている様子を記した学
級通信（子ども達の学校での様子を、家庭に知らせるた
めに、週一回程度だしているプリントです。）を紹介さ
せていただくかと思えます。5月と9月と12月、一年
間に3回、そうじに関する記述がでてくるのですが、こ
れをみていただいても、子どもらの成長ぶりがうかがえ
るといえるものです。

（5月28日）

いつも六年生が教室のそうじに来てくれました。
でも、六年生が移動教室にかけて留守の間は、自分た
ちでそうじをしなければなりません。みんな大張りきり

：なのですが、何をどうすればよいかわからず、ほうき
でゴミをはき終らないうちにぞうきんがけをはじめてし
まい、かえってゴミを散らしてしまったり、言われたこ
とを一つやると、あとどうしていいかわからずに、「先
生、何すればいいの?」といちいち尋ねに来たり…大混
乱で、教室のそうじに40分もかかっています。

（9月5日）

きのうから、自分たちで教室のそうじをしています。
全員でやっても30分以上かかります。もう少し早く、要
領よく出来るようになったら、給食と同様に、十人ずつ
のお当番さんにやってもらう予定です。

（12月20日）

給食の先生が「4組の子どもたちは、とてもいっしょ
うけんめいにそうじをしていますね。一年生でも、やら
せればこんなにじょうずにそうじができるものなのか
と、いつも感心してみていました。」とおっしゃって下
さいました。そうじの時間に、わざわざ4組まで来て、
子どもたちの前でほめてくださったので、子どもたちの

うれしさもひとしおだったようです。自分たちでそうじする事の新鮮さ、誇らしさが段々と失われてきて、「めんどろな仕事」になつてきています。「めんどろな仕事」でも、にげずにいっしょうけんめいに取り組めば、その努力をちゃんとみていてくれる人がいるのだという事を、この機会に、お家でも話してあげて下さい。

幼児期においても、自分のやりたいことに対してなら、主体的に、熱心に取りくむことができるでしょう。

小学校では、自分が今やりたくないことでも、スケジュールにあわせて学習しなくてはなりません。「好き」とか「嫌い」といった感情にふりまわされずに学習に「主体的に、熱心に」取り組むことを要求される学校生活は、六歳の子どもにとって、ずいぶんと厳しいものだらうと思います。それでも、喜々として子どもらは学校にやってきます。少しくらいの熱なら親を説きふせて登校してきてしまいます。何でそんなに学校が好きなのかと、不思議に思われる程です。あるいは、好きなのは

なく、「もつともつと良い子になりたい」がためなのかもしれません。子どもらが学校に寄せる信頼と期待の大きさに比べて教師個人のもっている力の何と小さいことでしょう。それでも、平然と教師でいられるのはどんな問題も担任と子どもらと、学級全体で答えていけば良いのが小学校という場所であるからです。

「みんな、ひとりひとり違うんだよ。でも、いっしょに暮らしていこうよ。」

(練馬区立田柄第二小学校)